

南河内小中学校

各部会の取組

<学習指導部会>

【目指す子ども像】

自分の考えをもち、主体的に学び合う子

【実践研究課題】

基礎基本の定着を図り、児童生徒が意欲的に取り組む授業の工夫
～確かな学力と主体的に学び合う態度の育成を目指して～

【児童生徒の実態】

自分の考えをもち、主体的に学び合う態度を深め合うための土台となる基礎基本の力については個人差が大きい。

【部会のねらい】

9年間を通して児童生徒の「主体的に学び合う態度の育成」を目指す。そのために、「基礎基本の定着、学習習慣の見直し」「児童生徒が意欲的に集中して取り組める授業の工夫」について取組を進め、小中一貫校の良さを生かしながら指導の実践や学び合う教員集団を目標とする。

視点	<A> 教育課程の 工夫改善	 教育活動の 連続性の確保	<C> 教職員間の 連続・協働	<D> 家庭・地域との 連携・協力
----	----------------------	------------------------	-----------------------	-------------------------

取組	<ul style="list-style-type: none">・授業、朝の活動(週2回「ぐんぐんタイム」)、家庭学習などを通して、基礎基本の定着を図る。・前・後期課程で児童生徒の課題の共有を図り、作成した改善プランを基に課題解決に向けた具体的な取組の共通実践を図る。・校内授業公開期間の設定。(全教員公開)
成果	<ul style="list-style-type: none">・朝の活動では、前学年の学習内容や基礎問題に取り組ませることができた。・校内授業公開を通して、前期課程から後期課程への教科の系統性や発達段階を確認することができた。また、前期課程と後期課程のそれぞれの指導の特色や良さを知ることができた。
課題	<ul style="list-style-type: none">・朝の活動では児童生徒の取組に個人差が出てきてしまった。また、時間の確保が難しいスクールバス登校の児童もいた。・とちぎっ子学習状況調査の分析などを通して共通の課題を設定し、学力向上を目指しているが、やはり9年間の幅は大きく、また学年によっても特性がかなり変わるので、決定的な課題の共有は難しい。・授業公開期間中、授業時数の関係や定期テスト前で自習等にすることが難しく、参観したい授業に行けないことがあった。また、空き時間との兼ね合いで参観が難しい授業もあった。



夕顔祭



いじめ防止強調月間



縦割り清掃

<特別活動部会>

【目指す子ども像】

学校行事等における異学年交流などにより、人とのつながりを大切にしながら共遊・協働する中で、よりよい人間関係や集団を築こうとする児童生徒

【実践研究課題】

学校行事をはじめとし、集会や委員会活動など、昨年度よりも多くの場面において、前期課程・後期課程の児童生徒の交流場面を設定し、異学年集団活動の実践を充実させる。

【児童生徒の実態】

昨年度同様、異学年との交流に抵抗が少なく互いに思いやりをもって活動することができる。その場の状況を理解・判断し、自主的に行動する児童生徒が少ないのは課題である。

【部会のねらい】

異学年活動を通して、望ましい人間関係の形成を図るとともに、自覚や責任、思いやりや協力の姿勢を育む。

視点	<A> 教育課程の 工夫改善	 教育活動の 連続性の確保	<C> 教職員間の 連続・協働	<D> 家庭・地域との 連携・協力
----	----------------------	------------------------	-----------------------	-------------------------

取組	・昨年度の反省から、全校共遊以外の場面において、異学年活動を取り入れる。その際、事前・事後における前期課程・後期課程の教職員の共通理解を確実に図る。子ども未来プロジェクトと連動した「つながり」をテーマとして、異学年交流を実践していく。
成果	・学校行事や清掃活動を中心に、異学年交流の機会が大幅に増加した。その結果、児童の不安軽減、後期生のリーダー育成において効果が見られた。また、「多様性」を軸に子ども未来プロジェクトの諸活動を実践した結果、児童生徒の「違い」や「個性」を大切にしようとする気持ちが高まった。
課題	・特に、全校共遊は最上学年の負担が大きく、実際に班員を動かせるリーダーの数が班数に対して十分でなかった。また、7年生・8年生の立場が曖昧であり、リーダーとして機能しなかった。次年度は最上学年だけでなく、後期生全員で下級生と連携する必要がある。

<児童・生徒指導部会>

【目指す子ども像】

- ・時と場に応じて、元気よく気持ちのよいあいさつができる。
- ・いつも時刻を守り行動することができる。
- ・全校児童生徒の活動を通して、コミュニケーション能力を育む。

【実践研究課題】

9年間を通して、コミュニケーション能力の育成を図るとともに、礼儀や規範意識を高めていく。

【児童生徒の実態】

素直で穏やかな児童生徒が多く、休み時間には前期課程・後期課程の枠を超えて児童生徒と一緒に遊ぶ様子も見受けられる。一方、昨年度からあいさつや返事の声が小さかったりできななかったりする児童生徒も見られる。また、自分の考えや意見・思いなどを伝えることが苦手な児童生徒が多く、課題と考えている。

【部会のねらい】

前期課程・後期課程の教職員が、あいさつや時間を守らせることの大切さを共通理解し、系統的に礼儀や規範意識の醸成を図るとともに、いじめを許さない心を育んでいく。

視点	<A> 教育課程の 工夫改善	 教育活動の 連続性の確保	<C> 教職員間の 連続・協働	<D> 家庭・地域との 連携・協力
----	----------------------	------------------------	-----------------------	-------------------------

取組	・学級や専門委員会等で、あいさつの意味を考えさせ、元気よく気持ちのよいあいさつについて考えさせる。 ・いじめ防止強調月間で、前期課程・後期課程を合わせて交流させ、いじめについて話し合いをさせる。 ・特活部会と連携し、縦割りでの共遊において、異学年交流の意味を考えさせる。
成果	・前期課程・後期課程全体であいさつ運動を実施することができ、あいさつについて学校全体で考える機会を得られた。また、以前に比べ自主的にあいさつができる児童生徒が増えてきた。 ・いじめ防止強調月間における各学級における話し合いや中央委員などの代表者による学校全体の意見共有が行われ、学校全体で交流を深めながらいじめについて真剣に考えることができた。 ・全校共遊だけでなく縦割りの清掃活動などによって異学年交流が深まり、異学年交流について考える機会となった。
課題	・児童生徒にあいさつ運動の目的の明確化や共有をさせ、児童生徒が共通の認識をもった上での活動とすることが必要であった。 ・いじめに対する話し合い活動で、発達段階に応じた活動の検討。 ・全校共遊の班による取組の差の解消。